

# 各地の民話・伝承

## 山添村の神野山 に伝わる民話

### 天狗のけんか

伏拝

昔、神野山は、天狗が住んでいる杉の木が一本生えているだけで、禿げ山だったそうです。

一方、伊賀の国にある青葉山は、緑が豊かで、たくさん草木が生い茂り、その間に奇岩もたくさんあって「庭園」のよう

だったそうです。

そして、神野山と青葉山には、それぞれ天狗が住んでいて、互いにたいそう仲が悪かったようで、いつもけんかばかりしていたそうです。

ある時、二人の天狗は、ささいなことから、物を投げ合うけんかを始めたそうで、青葉山の天狗はたいへん怒って、草木や岩を手当たり次第に神野山へ投げてきたそうです。

けんかが終わって見ると、青葉山はもとの草木や岩がなくなり、禿げ山となって、神野山は飛んできた岩で鍋倉溪ができて、山の頂上に至るまで草木が生い茂るようになりました。そして九十八夜のころになると、つっじの花が、山頂に咲きみだれるようになったそうです。

(奥西 要)

### 他惣治天狗 一 大塩

むかし、柚人が集まり、焼き畑農業をしていたころの話や。大塩に他惣治という若い男がいたそう。まだ十か、十一歳のええからだの子で、すばしっこい上にあらっばいことが好きで、ひまを見つけては神野山へかけ登り、樫の棒をふりまわして遊んだそう。

大和国中で一番力のある人になりたいたと、一心に「えいえい」と岩や木をたたきまわって、その声は伊賀の山々まで聞こえたそう。

あまり熱心なんで伊賀の青天狗が見聞きして「ええ根性の子がいるもんやないか。ひとつわしの弟子として仕込んでやろかなあ」と思つて声をかけた。

「その子ども、おれは伊賀の青天狗じゃが、弟子になる気はないかなあ」

なにしろ天狗の声じやもの、谷から山からおんおんと聞こえてきた。

それを聞いてびっくりしたのは神野山の赤天狗。

「ええ、何言つてんねん。あの子はわしがとうから目をつけてる子で、お前なんぞに渡せんわ」と言つたと。

「やかましい。先に言い出したのはおれや。こつちへよこせ」  
「あほらしい。わたせるかいな」

とうとう神野山の赤天狗と伊賀の青天狗がけんかをはじめたが、なにしろ離ればなれで言い合つていて切りがない、と言うので、伊賀の天狗が山の岩をぐつとおこして力のかぎり放つてきたのだと。

岩は雲をやぶつてあとからあとからピュン、ピュン飛んできたが、神野山の天狗はおどろかず、とび切りの術であつちへひらり、こつちへひらりと軽いこと。心配なのは天狗より他惣治のほうで、杉の木のとっぺんか

ら見ていると、岩は神野山から  
ごろんごろんと下の山に落ちる  
ようになってきた。

「えらいこつちや、岩がころ  
げたらどうしよう。やめてくれ  
よう」とどなったが、青天狗は  
やめなかつたんだと。

そのうち向こうの伊賀の山は、  
あとからあとから岩を引きおこ  
すんで、木はひっくり返り、穴  
ぼこだらけになったんや。

「やめてくれよう」と他惣治  
がさげんだら、赤天狗が言うた。  
「心配いらん、岩が村に落ちる  
ことないがな。けど、そんなに  
気になるなら、わしの術で、あ  
んな岩ぐらい止めてやる」

と言って、ハッタと伊賀の方  
をにらむと、岩はぼたりと飛ん  
でこなくなった。

「どうや、伊賀の青天狗。お前  
んところはハゲ山になってしもた  
がな、ファツハツハ」と笑った。

「さあ他惣治、きょうからわし  
が天狗の術を教えてやる。よい  
か」「はい、たのみます」こう  
して他惣治は神野山の赤天狗の

弟子になったんや。

それから、じきに他惣治は天  
狗とび切りの術をおぼえて村へ  
帰って来た。

大塩の村から六里（二四キロ  
メートル）の奈良の町へ行くの  
も、夕方からひと飛びに飛んで  
「他惣治の天狗とび切り」とえ  
らい名高いものになったと言う。  
鍋倉溪のあの多くの黒い岩は、  
伊賀の青天狗の放ったものが集  
まってできたものやと伝えられ  
ているのや。

（徳谷 清）

出典「村の語りべ」

山添村